中学校国語教育における和歌学習の可能性
―教科書に掲載された万葉歌の読解を考える―

市瀬　雅之

はじめに

国語教育の授業に携わっていると、履修生から、中学校の教科書の中でも、古典、特に和歌の学習について、読解と指導が難しいとの声を聞く。そこで本稿は、光村出版の『国語１』から『国語３』の教科書を教材の一例として、掲出されている和歌を読む。すべてを一度に取りあげることは難しいので、特に万葉歌を読み解くことを試み、指導内容を検討してゆくための一助としたい。

一、三年生に配当された和歌の学習

はじめに、指導要領と当該教科書の中に、和歌学習の位置を確認しておく。

『中学校学習指導要領』（平成二十年三月告示 平成二十二年十一月一部改正 文部科学省）は、「第二章 各教科 第一節 国語」に〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕を設けて、

(1)「Ａ話すこと・聞くこと」、「Ｂ書くこと」及び「Ｃ読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。

ア 伝統的な言語文化に関する事項
イ 言葉の特徴やきまりに関する事項
ウ 漢字に関する事項

を準備している。

「ア 伝統的な言語文化に関する事項」には、

〔第一学年〕
（ア）文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。
（イ）古典には様々な種類の作品があることを知ること。

〔第二学年〕
（ア）作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと。
（イ）古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。

〔第三学年〕
（ア）歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと。
（イ）古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと。

を求めている。これに当該光村図書は、

『国語１』５いにしえの　心にふれる
古文・音読　音楽を楽しもう　いろは歌
古文・解説　月に思う
古文　蓬莱の玉の枝―「竹取物語」から
漢文　今に生きる言葉

『国語２』５いにしえの心を訪ねる
古文・音読　音読を楽しもう　平家物語
古文　扇の的――「平家物語」から
古文　仁和寺にある法師――「徒然草」から…兼好法師
漢詩・解説　漢詩の風景　……石川忠久

『国語３』５いにしえの心と語らう
古文・音読　音読を楽しもう　古今和歌集　仮名序
古文　君待つと――万葉・古今・新古今
古文　夏草――「おくの細道」から……松尾芭蕉
古文・解説　古典を心の中に……竹内正彦

の教材をもって応えている。平成二十四年度版の教科書と比較すると、当該『国語１』が収載していた「七夕に思う―語り継がれ、読み継がれてきたもの」が、平成二十八年年度版においては「月に思う」に変更されている。

和歌の教材の変化に留意すると、前者は『万葉集』から、

（イ）（ワ）（ン）（ワ）
彦星（ひこほし）と織女（たなばたつめ）と今夜（こよひ）逢はむ天の川門（かはと）に波立（なみた）つなゆめ

彦星と織女星とが今夜会うという天の川の渡り場に、波よ、荒く立つな、決して。

を紹介していたのに対して、後者は「百人一首」から、

（ズ）　藤原顕輔（ふじわらのあきすけ）
秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出（い）づる月の影のさやけさ

秋風によってたなびいている雲がとぎれた間を通って、漏れ出る月の光のなんとすがすがしいことよ。

を引用している。日本に現存する最古の歌集である『万葉集』に求めていた和歌の導入を、小学校で親しむ「百人一首」に変更している（注）。「古典特有のリズム」を「いろは歌」に学び、「百人一首」が和歌であることを確認させている。

一年生で触れ得た和歌の学習は、当該教科書において、二年生の古典に引き継ぐ先を持たない。三年生を待たねばならないところに、和歌学習が難しいと捉えられている様子がうかがわれる。

（注）光村図書では、百人一首に関わる教材を、小学校『国語 三 下』「かるた」江橋崇と、同『国語 四 下』「百人一首に親しもう」に準備している。『万葉集』からとは断っていないが、小学校『国語 四 上』「短歌・俳句に親しもう（一）」には、志貴皇子の「石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも」（８・一四一八）が引用されている。三年生及び四年生で学んだ和歌の学習は、五年生～六年生に継続する先を持たない。中学校一年生の生徒たちは、三年ぶりに触れる和歌の学習となる。

二、持統天皇歌への検討

当該『国語３』は、和歌の学習教材として、「古今和歌集　仮名序」にはじまる。内容に和歌とは何かを学び、音読することで、言葉の響きを味わうことが求められている。これに次ぐ「君待つと――万葉・古今・新古今」に、和歌の読解が準備されている。単元の目標は、

・効果的な表現や語句の使い方に着目して、歌を読み味わう。
・和歌に表れた昔の人の心情や情景を読み取る。

と示されている。万葉歌は、そのはじめに学ぶ教材となる。

『古今和歌集』の「仮名序」に、歌とは何かを学んだ後で、『古今和歌集』や『新古今和歌集』の歌を読むことには、時代的な流れを感じる。しかし、「仮名序」以前に編まれた『万葉集』の歌は、どのように読み解き、位置づけてゆくのかが問われる。

教科書の「出典」には、『万葉集』が、

現存する日本最古の歌集。二十巻。約四千五百首の歌を収める。天皇や貴族、兵士、農民など、広い階層の人々の素朴な感動が、生き生きと力強く歌われている。長い期間に多くの人々の手を経て、奈

良時代の末頃までに現在の形にまとめられたものであろうといわれる。（以下略）

と解説されている。万葉歌の表現に「素朴な感動」や作者の「生き生きと力強く」生きる様子を読み味わい、天皇から農民までの多様な心情や情景を読み取ることが求められることになる。

掲載されている歌を一首ずつ検討していこう。

春過ぎて夏来るらし白たへの衣干したり天の香具山　　持統天皇

春が過ぎて、夏が来たらしい。真っ白な衣が干してあるよ、天の香具山に。

右の歌は、『万葉集』の巻一に「天皇の御製歌」と題詞が施され記されている。直前に記された標目に、「藤原宮に天の下治めたまひし天皇の代　高天原広野姫天皇　元年の丁亥、十一年に位を軽太子に譲り、尊号を太上天皇といふ」とあることから、持統天皇が作者となる。『国歌大観』の二八番歌に相当する。

教科書は脚注に、作者である持統天皇を、

持統天皇　六四五―七〇二　第四十一代天皇。女帝。柿本人麻呂をはじめ多くの優れた歌人を見いだし、和歌の発展に貢献した。

と紹介する。「柿本人麻呂をはじめ多くの優れた歌人を見いだし、和歌の発展に貢献した」と記すためには、相応の説明が必要になるのではないだろうか。

歌の内容に立ち入ってみると、上二句に夏の到来が宣言されている。その理由が、三句と四句に「白たへの衣干したり」と示される。結句が香具山の景であることを明らかにしている。

一読して、生徒がもっともわからないと感じるのは、「白たへの衣干したり天の香具山」との表現だけで、どうして夏の到来を感じることができるのかではないだろうか。

「香具山」に「天の」が冠せられているところに着目すると、『伊予国風土記』逸文に、

（伊予の国の風土記に曰ふ）

伊予の郡。

郡家ゆ東北のかたに天山あり。天山と名くる由は倭に天の加具山あり。天ゆ天降りし時二に分かれて、片端は倭の国に天降りき。片端はこの土に天降りき。因りて天山と謂ふ、本なり。（以下略）

（新編日本古典文学全集『風土記』小学館　一九九七年）

とみえる。「天の」には、天から降ってきた神聖な山として、特別視されていたことが想像される。『古事記』上巻に残される、天の岩屋戸神話では、速須佐之男命の乱暴によって天の岩屋戸に隠れてしまった天照大御神を連れ出すための祭事に、

（前略）是を以て、八百万の神、天の安の河原に神集ひ集ひて、高御産巣日神の子、思金神に思はしめて、常夜の長鳴鳥を集め、鳴かしめて、天の安の河の河上の天の堅石を取り、天の金山の鉄を取りて、鍛人の天津麻羅を求めて、伊斯許理度売命に科せ、鏡を作らしめ、玉祖命に科せて、八尺の勾璁の五百津の御すまるの珠を作らしめて、天児屋命・布刀玉命を召して、天の香山の真男鹿の肩を内抜きに抜きて、天の香山の天のははかを取りて、占合ひまかなはしめて、天の香山の五百津真賢木を、根こじにこじて、上つ枝に八尺の勾璁の五百津の御すまるの玉を取り著け、中つ枝に八尺の鏡を取り繋け、下つ枝に白丹寸手、青丹寸手を取り垂でて、此の種々の物は、布刀玉命、ふと御幣と取り持ちて、天児屋命、ふと詔戸言禱き白して、天手力男神、戸の掖に隠り立ちて、天宇受売命、手次に天の香山の天の日影を繋けて、天の真拆を縵と為て、手草に天の香山の小

竹の葉を結ひて、天の石屋の戸にうけを伏せて、蹈みとどろこし、神懸り為て、胸乳を掛き出だし、裳の緒をほとに忍し垂れき。爾くして、高天原動みて、八百万の神共に咲ひき。

（新編日本古典文学全集『古事記』小学館 一九九七年）

と二重線を施したように、「天の香山」で採取されたものの使用が求められている。神聖視された香具山（香山）が、祭祀に関わる場として理解されていた時期のある様子がうかがわれる。

神聖視された香具山に干された衣であれば、「白たへの衣」もまた、特別視される。前掲した『古事記』上巻の内容が、神事であることに留意すると、今日でも、神職の白装束を想起させることは難しいことであるまい。香具山では、祭祀の準備が進められている。

何のための祭祀なのかは、「夏来るらし」に初夏を見つけることで、田植えを連想することができよう。ゴールデンウィーク中の宿題として、夕方のテレビニュースを見ておくようにすると、今日でも、田植えに関わるイベントや神事の紹介を目にすることができる。神事の白装束が、香具山に干された景を表現することで、持統天皇は夏の到来を告げている。

指導書は、「指導上の参考」に作歌時期を、

（前略）藤原宮の東方にある香具山の山腹に乾されている衣の際立つ白さを見て、夏の訪れの喜びを詠んだ歌である。季節感そのものを歌うという方向もまだ未分化であり、しかも春と秋がことに愛された時代にあって、あまり歌われることのない夏を、さわやかに歌った点が注目される

と説くが、指導書が原文の出典に掲げる新編日本古典文学全集『萬葉集①』（小学館 一九九四年）頭注は、

藤原京から東南方に見たとも考えられるが、飛鳥から北方に望んだ可能性の方が大きい。

と記す。

香具山は、明日浄御原宮からも見えないわけではない。しかし、その距離はやはり遠く、「白たへ」が「衣」であるか否かを見分けるのは難しい。にもかかわらず藤原京遷都後の歌なのだとの見方に議論が展開しないのは、収載する巻一が表す時間軸の中で、二八番歌が持統朝の最も早い時期の歌として記されていることによる。

改めて「白たへの衣」が干される景に留意すると、前掲『萬葉集①』の頭注は、これに、

持統朝ではその四年十一月以前は元嘉暦、それ以後は儀鳳暦をも参照して両暦併用したもののようである。

と記している。『日本書紀』が、持統四年（六九〇）十一月十一日条に、「勅を奉りて、始めて元嘉暦と儀鳳暦とを行ふ。」と記すことを指している。持統天皇が、新しい暦法に従って「春過ぎて夏来るらし」と宣言し、それにふさわしい風景を「白たへの衣干したり天の香具山」と表現した可能性を考えることができる。眼前にある景色を詠んでいるのではなく、歌によって創出されている可能性も捉えておかねばならない。

指導書の「指導上の参考」には、「対照的な色彩を用いた表現に着目させたりする」とあるが、「白たへ」に白は認められても、「天の香具山」からは、直ちに「緑」を連想することが難しいように思う。

むしろ二八番歌は、日本人が季節の到来を詠みはじめた早い例となる。日本人は四季に敏感だといわれるが、歌として意識的に詠まれはじめる時代の到来にこそ目を向けるべきであろう。『日本書紀』は、斉明六年（六六〇）五月条に「皇太子、初めて漏剋を造り、民に時を知らしむ」と記す。時が刻まれ、暦に従って季節の到来を知り、それらを歌に表すことのできる時代が到来する。そこに持統天皇の歌が位置づけられる。

「持統天皇」の解説に疑問を呈したが、以上のように見てくると、紹介には、天武天皇が準備した藤原京への遷都を成していることを記すべきように思う。

古代律令国家に至る過程において、暦に従って年中行事が整えられてゆく段階を認め、言葉の世界にも、季節が積極的に詠まれる時代が到来する。その象徴として説明することが重要であろう。季節詠は、持統天皇と同時代とされる柿本人麻呂歌集を尋ねても、七夕歌等を紹介することができる。

三、柿本人麻呂歌への検討

次の歌を読んでみよう。

東（ひむがし）の野に炎（かぎろひ）の立つ見えてかへり見すれば月傾（かたぶ）きぬ　柿本人麻呂（かきのもとのひとまろ）

東の方の野にあけぼのの光が見えて、振り返ってみると、月は西に傾いている。

『万葉集』は、題詞に「軽皇子、安騎の野に宿る時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌」と記している。「軽皇子」は、先の持統天皇の孫に当たり、即位すると文武天皇となる。その軽皇子が、安騎野へ狩りに出かけた時に柿本人麻呂が詠んだ歌として記されている。『国歌大観』では四八番歌に相当する。

教科書の脚注は、柿本人麻呂を、

（生没年未詳）持統・文武両天皇に仕えた宮廷歌人。長歌に優れ、歌聖と称せられる。

と紹介する。末尾の「歌聖と称せられる」との記述には、もう少し説明が必要なのではないだろうか。人麻呂を「歌聖」と位置づけるのは、『万葉集』ではない。教科書が先の単元として掲げた仮名序に、

古よりかく伝はるうちにも、ならの御時よりぞひろまりにける。かの御世や歌の心をしろしめしたりけむ。かの御時に、正三位柿本人麿なん歌の聖なりける。これは、君も人も身を合はせたりといふなるべし。秋の夕、龍田河に流るるも紅葉をば帝の御目に錦と見たまひ、春の朝、吉野の山の桜は人麿が心には雲かとのみなむ覚えける。また、山部赤人といふ人ありけり。歌にあやしく妙なりけり。人麿は赤人が上に立たむことかたく、赤人は人麿が下に立たむことかたくなむありける。

ならの帝の御歌

龍田河紅葉乱れて流るめりわたらば錦なかや絶えなむ

人麿

梅の花それとも見えず久方の天霧る雪のなべて降れれば

ほのぼのとあかしの浦の朝霧に島隠れゆく舟をしぞ思ふ

赤人

春の野にすみれ摘みにと来し我ぞ野をなつかしぬ一夜寝にける

和歌の浦に潮満ちくれば潟をなみ葦辺をさして鶴鳴きわたる

この人々をおきて、またすぐれたる人も、呉竹のよよに聞え、片糸のよりよりに絶えずぞありける。これよりさきの歌を集めてなむ、『万葉集』と名づけられたりける。

（新編日本古典文学全集『古今和歌集』小学館　一九九四年）

と記される。傍線で示したように、「仮名序」は、人麻呂を三位とするが、当時の人麻呂は、正史に名を見せていない。指導書が「柿本人麻呂」の項で「六位以下の下級官人であったため、その生涯は未だ明確にされていない」と記すとおりである。残された歌が、「宮廷歌人」と称したくなるような内容を備えており、『万葉集』には、人麻呂歌が高く評価

されていた様子をうかがい知ることはできるのだが、「歌聖（歌の聖）」との表現は見出されない。先の単元が「仮名序」にはじまることを念頭に置くと、『古今和歌集』において「歌聖」と位置づけられてることを明記すべきであろう。

歌は、

軽皇子、安騎の野に宿らせる時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌

やすみしし　我が大君　高照らす　日の皇子　神ながら　神さびせすと　太敷かす　京を置きて　こもりくの　泊瀬の山は　真木立つ荒き山道を　岩が根　禁樹押しなべ　坂鳥の　朝越えまして　玉かぎる　夕さり来れば　み雪降る　安騎の大野に　はたすすき　篠を押しなべ　草枕　旅宿りせす　古思ひて　（1・四五）

短歌

安騎の野に宿る旅人うちなびき眠も寝らめやも古思ふに　（1・四六）

ま草刈る荒野にはあれどもみち葉の過ぎにし君の形見とそ来し　（1・四七）

東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ　（1・四八）

日並の皇子の尊の馬並めてみ狩立たしし時は来向かふ　（1・四九）

（新編日本古典文学全集『萬葉集①』小学館　一九九四年）

の一群から、反歌の一首が独立した形で紹介されている。

この歌が、題詞から全てを含んで記されていたなら、旅の目的は、四五番歌の結句に「古思ひて」と表されていることが留意される。四六番歌には「うちなびき眠も寝らめやも」との表現に、興奮冷めやらず眠れない夜があり、その先に「古思ふに」と示されている。古への思いは、四七番歌に「もみち葉の過ぎにし君の形見とそ来し」と具体化されている。その先に四八番歌の景色は詠出されている。そして、四九番歌の「日並の皇子の尊」に亡き父草壁皇子の姿が示されている。父がかつてそうであったように、これから安騎の野で狩りをしようとする軽皇子の勇姿が立ち現れるように閉じられている。歌の連続性に鑑みると、四八番歌に実景ばかりを強調することはできないように思う。

述べてきた説明を省いて一首だけを鑑賞すると、歌の内容は、「東の方の野にあけぼのの光」が見えることで、人麻呂が振り返って「月傾きぬ」との姿を見つけているところに大きな特徴が認められる。あけぼのの光に気づけば、やがて出現する太陽を、期待を込めて待ち続けることも可能なのだが、人麻呂歌はそれをしていない。敢えて振り返ることで、沈みゆく月を対比させている。偶然の景色を詠んだとするには、あまりに意図的な構図ではなかろうか。しかも、一方はこれから昇り来ることが予感され、もう一方は沈み行くことが示唆されている。

「東の方の野にあけぼのの光」を見つけながら、その行方をじっと見つめ続けるのではなく、振り返り「月傾きぬ」と詠んでいる。人麻呂歌が表す二つの景物にどのような印象を受けるのか、生徒たちの鑑賞を尋ねてみたい。

四、額田王歌への検討

君待つと我が恋ひ居れば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く　額田王

あなたのおいでを待って私が恋しく思っておりますと、我が家の戸口のすだれを動かして、秋の風が吹いております。

『万葉集』には、題詞に「額田王、近江天皇を偲ひて作る歌一首」と記されている。天智天皇への思いを詠む歌として、巻四の「相聞」に収

められている。『国歌大観』によると四八八番歌に相当する。

額田王について、教科書の脚注は、

（生没年未詳）万葉初期の女流歌人で、天智（てんじ）・天武（てんむ）両天皇に仕えた。叙景歌・叙情歌の両方に優れていた。

と記している。「叙景歌・叙情歌の両方に優れていた」と説明するためには、相応の裏付けが必要になるのではないだろうか。

初句の「君」は、歌しか記さない教科書では、誰を指すのかわからない。題詞に従って、「天智天皇」であることを注記すべきであろう。

指導書は「指導上の参考」に、四八八番歌の理解を、

すだれのそよぎを「君」の訪れの前兆と捉え、「待つ女」を読んだものとする解釈と、あくまでも季節の発見とする解釈がある。いずれにしても、叙情を叙景に重ねた情景一致の表現である。

とまとめている。「情景一致」を認めるためにも、やはり情と景が表す内容を明らかにする必要が求められる。

「君」に見出される天智天皇は、天智十年（六七一）に崩御する。これ以前の作と捉えてみると、前掲の持統天皇歌より、十年以上早い季節詠となる。日本人がいつから季節を詠むことができるようになるのか、大きな問題を抱えることになる。

ここでは、巻四の「相聞」の部に収められていることに留意したい。「我が屋戸（わがやど）のすだれ動かし秋の風吹く」には、「君待つと我が恋（あがこ）ひ居れば」との前提条件がついている。単なる季節詠として、秋の到来を知るだけに終わらない。指導書が原文の出典とする前掲『萬葉集①』は、頭注に、

六朝の閨怨詩に通じる歌境の歌。「夜相思フ、風ノ窓ヲ吹キテ簾動ク、コレ歓シキ所のノ来レルカ」（『清商曲辞』呉声歌、華山畿）の趣に近い。（以下略）

と記す。参考にすると、「すだれ動かし秋の風吹く」には漢籍の理解に基づいて、間もなく思い人がやってくる予兆を見出すことができる。

額田王歌には、他にも、

近江大津宮に天下治めたまふ天皇の代　天命開別天皇、諡を天智天皇といふ

天皇、内大臣藤原朝臣に詔して、春山万花の艶と秋山千葉の彩とを競ひ憐れびしめたまふ時に、額田王、歌を以て判る歌

冬ごもり　春さり来れば　鳴かざりし　鳥も来鳴きぬ　咲かざりし
花も咲けれど　山をしみ　入りても取らず　草深み　取りても見ず
秋山の　木の葉を見ては　黄葉をば　取りてそしのふ　青きをば
置きてそ嘆く　そこし恨めし　秋山そ我は　（1・一六）

と、秋に触れる歌が残されている。題詞は、天智天皇が中臣鎌足に詔して春秋の優劣を競わせている。「歌を以て判る歌」と記しているのは、他の者たちが歌以外を求められていたことを意味する。「春山万花の艶」や「秋山千葉の彩」の語句に顕著なごとく、詩宴が催されているのである。到来した季節を詠んでいるわけではない。額田王だけが漢詩の素材を歌にしていることになる。

こうした理解を教科書の掲出歌に当てはめてみると、漢籍の知識として得られた季節表現に合わせて、ふさわしい恋情を詠んでいるところに、指導書の記す「情景一致」が認められる。

歴史的には、近江遷都と重ね合わせながら、天智朝に隆盛となった漢詩が、額田王によって歌へと展開されてゆく中に、四八八番歌が詠まれていることになる。

国語の授業の中に、漢詩や漢文の授業が含まれている意味と結びつけても、捉えておきたい内容となる。

慎重にとの意見も出そうだが、額田王の説明には、『日本書紀』の天

武二年（六七三）二月条に「天皇、初め鏡王の女額田姫王を娶して、十市皇女を生しませり。」とある内容を反映すべきように思う。勘の良い生徒からは、直ちに歌の「君」との差異が指摘されよう。史実には、天智天皇が額田王を娶った記録は残されていない。『万葉集』が収載する、

中大兄　近江宮に天の下治めたまひし天皇　の三山の歌一首

香具山は　畝傍雄雄しと　耳梨と　相争ひき　神代より　かくにあるらし　古も　然にあれこそ　うつせみも　妻を　争ふらしき

（1・一三）

反歌

香具山と耳梨山とあひし時立ちて見に来し印南国原　（1・一四）

わたつみの豊旗雲に入日見し今夜の月夜さやけかりこそ

（1・一五）

右の一首の歌は、今案ふるに反歌に似ず。ただし、旧本にこの歌を以て反歌に載せたり。故に、今も猶しこの次に載す。

また、紀に曰く、「天豊財重日足姫天皇の先の四年乙巳に、天皇を立てて皇太子としたまふ」といふ。

或いは、

（天智）天皇、蒲生野に遊猟する時に、額田王の作る歌

あかねさす紫草野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る（1・二〇）

皇太子の答ふる御歌　明日香宮に天の下治めたまひし天皇、諡を天武天皇といふ

紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻故に我恋ひめやも　（1・二一）

紀に曰く、「天皇の七年丁卯の夏五月五日、蒲生野に遊猟す。時に、大皇弟・諸王・内臣また群臣、皆悉従ふ」といふ。

等の解釈に発展する話題を含んでいる。高校生になってから、更に『万葉集』を読む動機につなげておきたい気もするが、もちろん深入りはしない。質問をする生徒があれば、恋の歌は恋をしないと詠むことができないのかを問いかけておく。

五、山部赤人歌への検討

山部赤人

天地の　分かれし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　富士の高嶺を　天の原　振り放け見れば　渡る日の　影も隠らひ　照る月の　光も見えず　白雲も　い行きはばかり　時じくそ　雪は降りける　語り継ぎ　言ひ継ぎ行かむ　富士の高嶺は

天地が分かれたときから　神々しく高く貴い、駿河の国にある富士の高嶺を　広々とした大空に　振り仰いで見やると、空を渡る太陽の姿も隠れ、照る月の光も見えず、白雲もはばまれて行き滞り、時季を定めず雪は降っている。語り継ぎ、言い継いでいこう、この富士の高嶺は。

反歌

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にそ富士の高嶺に雪は降りける

田子の浦を通って出てみると、おお、なんと真っ白に富士の高嶺に雪が降っているよ。

右は、『万葉集』が題詞に「山部宿禰赤人が富士の山を望む歌一首　并せて短歌」と記す歌である。巻三の「雑歌」に収められている。『国歌大観』の三一七～三一八番歌に相当する。

山部赤人について、教科書の脚注は、

（生没年未詳）奈良時代初期の歌人。叙景歌に優れ、人麻呂と並び称される。

と記す。気になるのは「人麻呂と並び称される」との記述である。本論の三に掲出したように、『古今和歌集』の「仮名序」には、人麻呂と並び称されている。指導書は「山部赤人」の説明に、

大伴家持は、自分の歌の才能では「山柿の門」に達することもできないと記しているが、山は赤人、柿は人麻呂を指す。

と、『万葉集』にもその痕跡のあることを指摘する。しかし、指導書が原文の出典として掲げる新編日本古典文学全集『万葉集④』（小学館・一九九六年）には、三九六九番歌の頭注に、

当時、既にいずれ劣らぬ歌人と評されていた山部宿禰赤人と柿本朝臣人麻呂をさすか。

と疑問形で記されている。加えて、「また、漢語「山柿」の意と見て、人麻呂のみを指すという説もある。」と記している。『古今和歌集』の「仮名序」に、人麻呂と並び称されていると断るべきであろう。

歌の内容に立ち入ると、「天地（あめつち）の　分かれし時ゆ」と冒頭の二句だけで、事の起こりを天地創造からという気の遠くなるような時間の中に歌い起こしている。そのように遠い昔から、神々しく高く貴い駿河にある富士の高嶺を、天空に向かって振り仰いでみると、「渡る日の　影も隠（かく）らひ」と「照る月の　光も見えず」を対にして高さを極め、それが「白雲（しらくも）も　い行（ゆ）きはばかり」と改めて確認されながら、「時じくそ　雪は降りける」が組み合わせられ、高いばかりでなく、時を選ばないところに、降り続く雪の永遠が表現されている。そのように高く貴ければこそ、また長く続いてきた神聖な山の姿に感動すればこそ、「語り継ぎ　言ひ継ぎ行かむ」と呼びかける。そのような山の姿を「富士の高嶺は」と印象強く結んでいる。

長歌は、百人一首で五七五七七だけに親しんできた生徒たちがはじめて出会う歌体となる。古くは多様であったことを伝えたい。『万葉集』は、多様な歌体を持っていた歌々が、短歌化してゆくプロセスを理解することのできる貴重な歌集である。長歌の句数は多いが、対句に内容を繰り返し確かめられる効果を学びたい。声に出して読み、耳で聞いても内容を理解できるかを試してみることも大切なことであろう。歌は、文字を持たない段階からはじまる言語文化であることも伝えたい。

長歌はその名のとおり長いので、反歌には主題をくり返したり、なお言い足りないことを補足する役割がある。説明に終わるのではなく、長歌に対して、反歌がどのような関係になっているのを確かめたい。長歌は「駿河」の側にいることだけを示唆するが、反歌の上句は、赤人が「田子の浦」からでたところで富士山に出会ったことを表している。下句には、長歌の「時じくそ　雪は降りける」が、「ま白にそ」と印象に強く残るように表現され、富士の高嶺に雪が降る姿を想像させる。

この歌を読みながら、当時の富士山は本当に真っ白な雪が降り積もっていたのかどうか、生徒たちに尋ねてみたい思いを抱く。『万葉集』は、赤人の富士の歌の直後に、

富士の山を詠む歌一首　并せて短歌

なまよみの　甲斐の国　うち寄する　駿河の国と　こちごちの　国のみ中ゆ　出で立てる　富士の高嶺は　天雲も　い行きはばかり　飛ぶ鳥も　飛びも上らず　燃ゆる火を　雪もて消ち　降る雪を　火もて消ちつつ　言ひも得ず　名付けも知らず　奇しくも　います神かも　石花の海と　名付けてあるも　その山の　堤める海そ　富士川と　人の渡るも　その山の　水の激ちそ　日本の　大和の国の　鎮めとも　います神かも　宝とも　なれる山かも　駿河なる　富士の高嶺は　見れど飽かぬかも　（3・三一九）

反歌

富士の嶺に降り置く雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり　（3・三二〇）

富士の嶺を高み恐み天雲もい行きはばかりたなびくものを　（3・三二一）

右の一首、高橋連虫麻呂が歌の中に出でたり。類を以てここに載せたり。

を併記している。「燃ゆる火を　雪もて消ち　降る雪を　火もて消ちつつ　言ひも得ず　名付けも知らず」と表現された富士の山に、真っ白な高嶺は想像することができない。『続日本紀』の天応元年（七八一）七月六日条には、「駿河国が「富士山の麓に灰が降って、灰のかかったところは木の葉が萎えしおれました」と言上した。」との記事も見出される。見たままを詠んだとは限らない。

富士山の絵を描く課題を出してみると、現代でも多くの人が山頂を白く塗るのではなかろうか。赤人の歌は、その原形を詠んでいるような内容を備えている。

また、赤人がどうしてこのような歌を詠むに至るのかも、生徒たちには考えて欲しい気がする。今日の私たちが、観光地で美しい風景を写真に収め、帰ってから友達や家族に見せる気持ちに近い感覚を見つけられるのではないだろうか。

六、山上憶良歌への検討

次の歌を読んでみよう。

山上憶良（やまのうへのおくら）

憶良らは今は罷（まか）らむ子泣くらむそれその母も我（わ）を待つらむそ

私、憶良めは、もう退出いたしましょう。子供が泣いておりましょう。それ、その母親も　私を持っていることでしょう。

『万葉集』には、題詞に「山上憶良臣、宴を罷る歌一首」と記されている。巻三の「雑歌」に収められている。『国歌大観』の三三七番歌に相当する。

山上憶良についての脚注は、

六六〇～七三三？　奈良時代初期の歌人。壮年の頃、遣唐使の一員として唐に渡る。豊かな学識をもち、社会や人生を歌った。

と記している。三三七番歌の場合、その解説はどのように当てはまるのであろう。三三七番歌に「子」と「その母」が詠み込まれていることに留意すると、憶良の「惑へる情を反さしむる歌一首　并せて序」（5・八〇〇～八〇一）の序は、傍線で示すように、

或人、父母を敬ふことを知りて、侍養することを忘れ、妻子を顧みずして、脱屣よりも軽にし、自ら倍俗先生と称く。意気は青雲の上に揚がれども、身体は猶し塵俗の中に在り。未だ得道に修行せる聖に験あらず、蓋しこれ山沢に亡命する民ならむか。所以に三綱を指示し、五教を更め開き、遺るに歌を以てし、その惑ひを反さしむ。歌に曰く

と記し、歌にも

父母を　見れば尊し　妻子見れば　めぐし愛し　世の中は　かくぞ理　もち鳥の　かからはしもよ　行くへ知らねば　うけ沓を　脱き棄るごとく　踏み脱きて　行くちふ人は　石木より　生り出し人か　汝が名告らさね　天へ行かば　汝がまにまに　地ならば　大君います　この照らす　日月の下は　天雲の　向伏す極み　たにぐくのさ渡る極み　聞こし食す　国のまほらぞ　かにかくに　欲しきまにまに　然にはあらじか

（5・八〇〇）

（新編日本古典文学全集『萬葉集②』小学館　一九九五年）

と詠まれていることが想起される。「子」に至っては、その直前に記される「子等を思ふ歌一首　并せて序」（5・八〇二～八〇三）の序に、

釈迦如来、金口に正しく説きたまはく、「衆生を等しく思ふこと、羅睺羅のごとし」と。また説きたまはく、「愛するは子に過ぎたり

といふことなし」と。至極の大聖すらに、なほし子を愛したまふ心あり。況や、世間の蒼生、誰か子を愛せざらめや。

とあり、歌にも、

瓜食めば　子ども思ほゆ　栗食めば　まして偲はゆ　いづくより
来りしものそ　まなかひに　もとなかかりて　安眠しなさぬ
（5・八〇二）

反歌

銀も金も玉もなにせむに優れる宝子に及かめやも
（5・八〇三）

等が知られる。これらの歌を紹介しなくても、歌に子どもを詠むことが多くなかった時代であることを伝え、儒教や漢訳仏典の理解を活かして詠まれていることを紹介するだけでも、遣唐使の経験に基づいた豊かな知識のもとに詠まれていることが理解できる。子や妻を話題にしているところに、新たな知識を活かして社会や人生が詠まれている。

具体的な作歌事情について、指導書は諸説を併記するに留まる。教科書の脚注は、初句の『『ら』は、自分をへりくだっていう接尾語」と記すところに注意しているが、生徒たちには、憶良が「我」ではなく、自身の名で歌い起こしているところに受ける印象を尋ねてみたい。「可愛い」「幼い」との返事が返ってくれば、少しおどけて歌いはじめる憶良の様子をうかがうことができる。指導書が「その母」に「独特のユーモアが感じられる」と記す内容も、生徒たちがどのように受け止めるのかを確かめたい。日本では、父親が自宅で、妻のことを「お母さん」と呼ぶことを想起すると、案外普通のこととして受け止められてしまうのかもしれない。

歌から推定される憶良の年齢を尋ねてみても、現代にあっては、幅の広い回答が得られよう。前掲した八〇〇～八〇三番歌と同じ神亀五年（七二八）の作と仮定してみると、六十九歳が算出できる。

この歌の理解の重要なところは、題詞に「宴を罷る歌」と記されているところに注意を促さねばなるまい。年長者がこの歌で終わらせる効果を問いかけてみると、儒教や漢訳仏典の知識を活かして、自身の子や妻を話題にしただけではなく、

さあさあ皆さん、憶良めはもう帰りますよ、ほらほら家では子供さんが、帰りを待っていますよ。ほら、その子のお母さんも、きっと皆さんの帰りを待っておられるでしょう。

との意味を込めていることを考えることができる。少しとぼけた歌い起こしの意味も、妻を「その母」と表現した意味も理解されよう。年長者として、自らの役割を知る憶良の知的な気配りを見出すことができる。また、歌が必要に応じて、宴という場で機能していたところまで説明することが可能になる。

七、東歌への検討

東歌（あづまうた）

多摩川にさらす手作りさらさらに何そこの児（こ）のここだ愛（かな）しき

多摩川にさらす手織りの布のように、さらささらに、なんでこの娘がこんなにもいとしいのか。

右の歌は、『万葉集』巻十四に収められた「東歌」に「右の九首、武蔵国の歌」と括り記された中の一首である。『国歌大観』では、三三七三番歌に相当する。

教科書は、脚注に「東歌」を「東国地方の歌」と記す。指導書には、「多摩川で働く若い女性たちに注がれる若者の熱い視線が感じられる歌である。」とある。このように解した時、もう少し尋ねてみたくなるのが、作者となる「若者」の存在である。指導書が原文の出典とする新編日本古典文学全集『萬葉集③』（小学館　一九九五年）は、頭注に「調布

の生産に携わる人々の歌か」と記す。教科が出典に記す『万葉集』の、天皇や貴族、兵士、農民など、広い階層の人々の素朴な感動が、生き生きと力強く歌われている。

との解説に照らし合わせると、「農民」を指すのであろうか。

ここに注目すべき点が幾つかある。一つ目は歌体である。都から遠く離れた武蔵国にあっても、歌といえば五七五七七の定型が一般的であったのであろうか。二つ目に序詞の使用である。指導書は、「一般に、中央の序詞が様式的な美の表現であるのに対して、東歌の序詞は直接的な生活感情の表現である場合が多い」と記す。確かに「多摩川にさらす手作り」には、生活感を見て取ることができる。それにしても、二句目の「さらす」が、導き出す「さらさらに」には、リズムも清涼感も十分に感じられる。三つ目に、方言が認められないことである。

巻二十が所収する武蔵国の防人歌には、

（大刀）　（月）

枕多之腰に取り佩きまかなしき背ろがまき来む都久の知らなく

（20・四四一三）

右の一首、上丁那珂郡の檜前舎人石前が妻の大伴部真足女

（愛しく）　（離れ）

大君の命恐み宇都久之氐真子が手波奈利島伝ひ行く

（20・四四一四）

右の一首、助丁秩父郡の大伴部少歳

（新編日本古典文学全集『萬葉集④』小学館　一九九六年）

と、傍線で示したような音の違いが認められる。これらに比較しても、洗練されているという印象が強い。歌の在り方と作者の関係づけは、単純ではなさそうに思う。

むしろ授業では、作者がどのような人物であったのかを問うことより、都の歌に対して、「東歌」と区別されていることの意味を尋ねてみたい。

武蔵国の生業を序詞に喩えた恋歌として読んでみると、歌い手が誰であるのかは直ちに問われない。都に住む天皇や貴族たちの暮らしや文化が歌に詠まれていただけではなく、東国の暮らしや文化を活かして詠まれた歌までを集めているのが『万葉集』の特徴なのである。

八、防人歌への検討

防人歌

父母が頭掻き撫で幸くあれて言ひし言葉ぜ忘れかねつる

父母が頭をなでて、無事でいるように、といった言葉がわすれられない。

『万葉集』に収められた防人歌のほとんどが、巻二十に「天平勝宝七歳乙未の二月に、相替りて筑紫に遣はさるる諸国の防人等が歌」と記しまとめられている。右の歌もその中に「二月七日に、駿河国の防人部領使守従五位下布勢朝臣人主の、実に進るは九日、歌の数二十首。ただし、拙劣の歌は取り載せず。」と記された歌の中の一首である。『国歌大観』では、四三四六番歌に相当する。

前掲の東歌には作者名が記されていないのだが、天平勝宝七歳（七五五）の防人歌には記されている。四三四六番歌にも「右の一首、丈部稲麻呂」とある。しかし、このことは、教科書にも指導書にも触れられていない。

歌の読みは、原文を見ると「知々波々我　可之良加伎奈弖　佐久安礼天　伊比之氐等婆是　和須礼加祢豆流」と、傍線を施した部分に、都の言葉と音の違いを認めることができる。

「父母が」と歌い起こされているところには、作者が両親と同居していた可能性をうかがわせる。「頭掻き撫で」との表現からは、作者の幼

さを感じるかもしれないが、指導書は、次の歌に類似表現があることを記している。

天皇、酒を節度使の卿等に賜ふ御歌一首　并せて短歌

食す国の　遠の朝廷に　汝等が　かく罷りなば　平けく　我は遊ばむ　手抱きて　我はいまさむ　天皇朕　珍の御手もち　かき撫でそ　ねぎたまふ　うち撫でそ　ねぎたまふ　帰り来む日に　相飲まむ酒そ　この豊御酒は　（6・九七三）

反歌一首

ますらをの行くといふ道そ凡ろかに思ひて行くなますらをの伴　（6・九七四）

右の御歌は、或は云はく、太上天皇の御製なり、といふ。

波線部は、天皇が節度使の安全を祈って行う行為として表現されている。これと同じように解すると、四三四六番歌の作者が年若いとは限らない。父母は、旅の安全を祈る行為として頭を撫でたことになる。その内容は、続く「幸くあれ」との表現に強く結びつく。作者は、その時のことを回想して、忘れられないと詠んでいることになる。

ここに重視すべきは、父母に見送られた時のことを回想する防人歌と、天皇が節度使を送り出す歌とが、発想も表現も類似していることである。そこに、作者の存在を考える余地もあるが、東歌と同様に深入りするのは避けた方が良さそうに思う。

むしろ生徒たちには、防人に命じられた旅が、今よりはるかに困難で厳しく、生きて帰る約束のないものであったことを知らせたい。そうであれば、見送る者も旅行く者も、無事に帰ることを祈らずにはいられなかったのであり、その行為が歌にも「頭掻き撫で幸くあれ」と表現されていることを理解することができる。

九、大伴家持歌への検討

大伴家持

春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ

春の園の、紅色に美しく咲いている桃の花の、下まで照り輝く道に出ていって立つ娘よ。

この歌は、巻十九の巻頭を飾る「天平勝宝二年（七五〇）三月一日の暮に、春苑の桃李の花を眺矚して作る二首」のうちの一首目である。『国歌大観』の四一三九番歌に相当する。

作者の大伴家持は、教科書の脚注に、

七一八？～七八五　奈良時代末期の歌人。「万葉集」の編纂に携わったとされる。「万葉集」には最多の四百七十余首を残している。最終歌である

新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事

の作者でもある。

と記されている。最終歌を記したのは、「『万葉集』の編纂に携わったとされる」と記す内容を、間接的に裏付けるためであろうか。もしそうであるなら「『万葉集』二十巻のうち、末尾の巻十七～二十は、「大伴家持の歌日記」或いは「歌日誌」といわれるほど、家持歌を中心に編まれている」と記す方が良いのではないか。

歌の内容は、春の園が「にほふ」との表現で、紅く華やかな桃の花で輝いている。その下には、花の美しさに照らし出された道があり、乙女が立っている。「下照る」との表現によって、道も乙女も、桃の花の美しさに照らし出されている。指導書は、結句に「桃の花に乙女を配し、絵画的で妖艶な趣を表している」と記す。「をとめ」には、家持の妻である坂上大嬢を重ねる説も紹介されているが、どのような乙女を連想す

るのかは、生徒たちに尋ねたい。桃の花が照り映える道の下に、各自が思い描く乙女を配置するのではないだろうか。言葉によって、描き出された春の園の美しい景色を楽しみたい。二首目の四一四〇番歌については、教科書に掲載された一首目の解説に直接影響を与えない。指導書の記す範囲を参考にする程度に留める。

指導書とは別の話題を提供しておけば、四一三九～四一四〇番歌には、同日の作として、

翻び翔る鴫を見て作る歌一首

春まけてもの悲しきにさ夜更けて羽振き鳴く鴫誰が田にか住む

（19・四一四一）

が併記されている。四一三九が春を園に美しく見出す一方で、家持は春の到来を「もの悲しきに」とも受け止めている。春の到来は、本来楽しむべきものなのだが、都を離れ守として越中国に暮らす体験が、家持の季節詠に変化の兆しを見せている。

おわりに

以上のように読む限りにおいて、『万葉集』は教科書の「出典」が記すような、

天皇や貴族、兵士、農民など広い階層の人々の素朴な感動が、生き生きと力強く歌われている。

との内容を、直ちには確認し難い内容を備えている。掲出する歌の内容に合わせて、

①漢籍の影響を受けながら、古代律令国家が形成される過程で、暦による年中行事が確立していく中で、日本人が季節を詠みはじめた頃の歌が記されている。

②歌に詠まれた景色は、実景ばかりにこだわらない。主題に応じて表現されている。

④歌は、旅や宴席等、場の役割と要請に応じて詠まれ、活用されていた。

③表現する内容に応じて、五七五七七以前の多様な歌体が用いられている。歌体に合わせて、効果的に伝えるための表現技術が工夫されている。

⑤都の歌を中心に集められているが、地方にまで関心を広げ、東歌や防人歌のような歌までを幅広く集め、整理している。

⑥二十巻の末四巻は、「大伴家持の歌日記」或いは「歌日誌」と呼び習わされているほど、家持の歌を中心に編まれている。個々に編まれていた巻を『万葉集』として整理した人物として注目される。

こと等を、特徴として挙げるべきではないだろうか。

第三学年での和歌の学習は、入試への出題が少ないこともあって、消極的になることを危惧する。読むことだけに留まるのではなく、書くことにも目を向けて、親しむ機会を増やしたい。